

第3回 防災計画研究会

日時:2008年10月24日(14:50~)
場所:京都大学 木質ホール

災害後の生活復興に資する
コミュニティビジネスの可能性
に関する一考察

~阪神・淡路大震災と中越地震の事例分析より

大阪大学 CSCD 菅 磨志保

報告の概要

1. 研究の背景と目的
2. 研究方法:分析枠組みと調査概要
3. 結果と考察
 - (1)復興期のコミュニティビジネスの事業的特徴
 - (2)生活復興に果たすCBの役割
4. 今後の研究課題

→調査研究報告書:(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
http://www.hemri21.jp/bs/pdf/p01_0.pdf

1. 研究の背景・目的

災害=くらしの循環を断ち切る契機としての災害
「復興」:循環をつなぎ直す過程

住居政策、産業・経済政策(雇用)などのマクロな復興対策はあるが、個々のくらしの回復を実現させる有効な方策は皆無

被災者自身(支援者)が、身近なモノや特技で収入を得る努力
=コミュニティビジネスの試み
「地域資源を活用し経済循環を起こして地域課題を解決していく事業」

* この災害復興期に成立したコミュニティビジネスに注目(=以下、復興CB)

【研究の目的】

- ・具体的に何を実施し、どんな成果を出したか(実態を把握し、記述)
- ⇒災害復興期に特有な活動の特徴、生活復興に寄与している要素の抽出
- ・生活復興に寄与する事業的要素の抽出⇒課題解決に向けた方策(社会的提案として、復興計画への位置づけ、復興基金の助成メニュー等)

2. 研究方法

* 分析の枠組み:2軸(団体-個人)の設定
2地点(都市-中山間)の比較

⇒事業体(組織)に視点を置いた分析

起業の契機/地域活動の資源状況
→資源循環を成立させる条件の抽出

⇒被災者個人のくらしに視点を置いた分析

収入/生活時間、社会関係
→主体性・社会性の回復

調査概要

【調査A】組織に視点を置いた事業分析

期間:2006年9月-2007年2月(補足調査含む)/2007年8月-(2事例詳細)

- ①被災地NGO協働センター(まけないぞう) → 手芸品の生産・販売
- ②プロジェクト1,2(しじみちゃん、他)
- ③木馬の会、
- ④ゆいまーる神戸(弁当の宅配、他) → サービス提供(食事)
- ⑤長田神社前商店街振興組合 → 通信販売(商品)

- ⑥姉さの会(昼食の提供)
- ⑦やまびこの家(体験型宿泊施設(廃校)の経営) → サービス提供(食事・宿泊)
- ⑧和南津生産組合(かわぐちセット)
- ⑨えちごそう(商店連合による通信販売) → 通信販売(商品・物産)

【調査B】「中越地震・くらしと仕事調査」個人に視点を合わせた分析

期間:2006年11月~12月

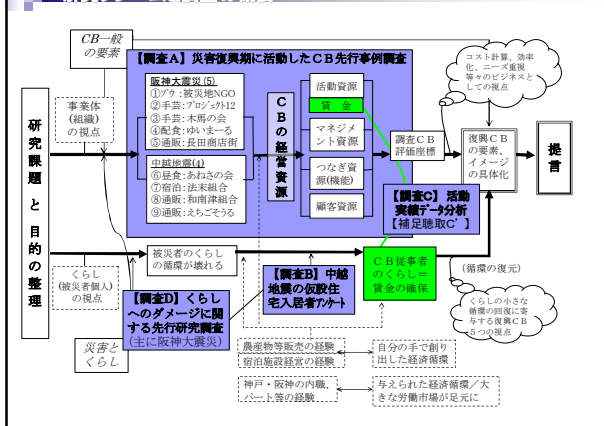
対象:長岡市・小千谷市の仮設住宅に入居する成人女性

【調査C】CBの従事者・活動実績データの収集と分析

→調査C':CB従事者個人へのヒアリング調査(2007年9月-11月)

【調査D】文献調査

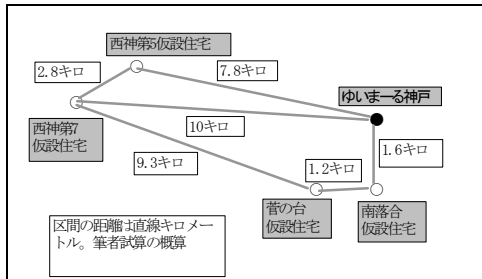
研究フレームと調査の概要



【調査C】ゆいまーる(配食サービス)

・成功への条件

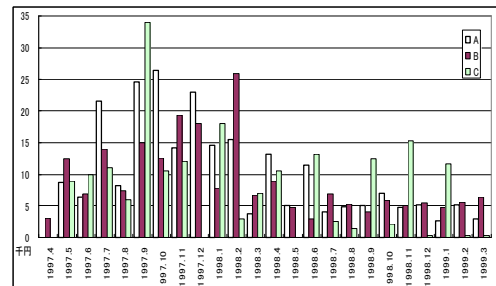
ゆいまーる神戸からの配食距離(一部)



【調査C】木馬の会(手芸品の生産・販売)

・協働作業を通じた生産管理への参加

上位3位の給料支払いの推移



【調査C'】「木馬の会」(手芸品の販売)

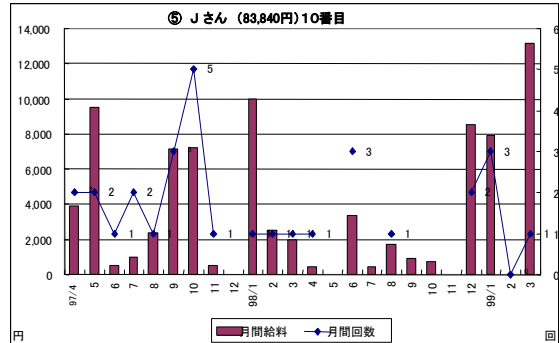
活動従事者調査

「木馬の会」給料台帳に記載 : 53人
→うち、6ヶ月以上活動に従事: 19人

- * 「おしごと登録カード」との重複36人
- * 19人全て、登録カードあり

「木馬の会」から往復葉書で調査への協力依頼
→給与支払い上位10人中、6人
+ ボランティア(無給の指導者)1人に聴取調査

入退院を繰り返しながら継続。「頼まれて、病院にもタオルを持ち込んでゾウを作った」



3. 結果と考察

(2) CBの役割【事例分析】

■ 収入の確保:

生活(復興状況)に合わせて時間等、調整

■ 社会性の回復:

協働作業を通じた交流の機会を提供

■ 主体性の獲得:

従事者(被災者)が、活動資源の編集にも参加(=事業の経営)。受援者→支援者へ

4. 今後の研究課題

- 災害・防災研究(復興期の生活再建支援)
→事業パターンごとのモデル抽出
- 市民活動研究(コミュニティビジネス)
→災害という特殊な条件下で、事業成立に働いたメリットデメリットの検討
- 持続可能な社会の研究(農山村・村おこし)